
[成果情報名] カンキツ「不知火」の無加温ハウス栽培による早期成園化と外観向上

[要約] カンキツ「不知火」は、計画密植した無加温ハウスで栽培することにより、結実2年目以降、成園並みの10a当たり3～4t以上の収量を安定して確保できるとともに、外観の優れた高品質果実を生産できる。

[キーワード] カンキツ、「不知火」、無加温ハウス、隔年結果、高品質

[担当部署] 果樹部・果樹栽培チーム

[連絡先] 092-922-4946

[対象作物] 果 樹

[専門項目] 栽 培

[成果分類] 技術改良

[背景・ねらい]

カンキツ「不知火」は、特徴的な外観を持つ高糖度な高級果実「デコポン」として急速に普及し、本県の中晩生カンキツの中核品種として生産の振興が図られている。しかし、「不知火」の露地栽培は着花が不安定で隔年結果が生じやすく、寒害を受けやすいなど問題点が多い。そこで、無加温ハウス栽培による生産安定の効果について明らかにする。

[成果の内容、特徴]

1. 無加温ハウス栽培は着花量、新梢発生量が安定しており、樹冠容積当たり収量は安定して高い。1樹当たり収量は露地栽培と変わらないが、隔年結果しにくい（図1、一部データ略）。
2. 露地栽培は隔年結果により収量が不安定であるが、無加温ハウス栽培では結実2年目の6年生以降3～4t/10a以上の成園並みの収量を安定して確保できる（図2）。
3. 無加温ハウス栽培では、果実のネックが明瞭で果皮の傷や水腐れが少なく、外観が優れる。可食期は2月下旬で露地栽培に比べてやや早く、果実肥大、糖度は露地栽培と同等で、甘味比の高い2L級果が生産できる（図3、表1、一部データ略）。

[成果の活用面・留意点]

1. 無加温ハウス栽培は、11月から翌年7月の梅雨明け後まで天井ビニルを被覆する。
2. 連年安定生産のため、生理落果終了期に樹冠容積1m³当たり18果程度に早期摘果を実施するとともに、夏枝の確保、9月以降の秋芽除去、仕上げ摘果を徹底する。減酸を促すため夏季乾燥時はかん水を行う。
3. 早期収量確保のため、縮間伐を前提とした栽植密度1.5～2.0×2.0m程度の計画密植とし、樹冠が拡大した10年生前後から隣接樹との枝の交差に応じて縮間伐を行う。
4. 苗木はウイルス、ウイロイドフリー樹に弱毒ウイルスM16Aを接種した苗を用いる。

[具体的データ]

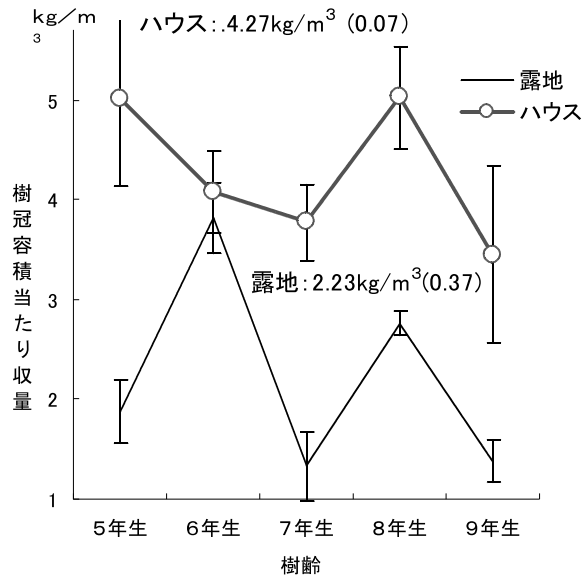


図1 無加温ハウス栽培における「不知火」の樹冠容積当たり収量 (平成16~20年)

- 注) 1. 数値は5~9年生までの平均値
 2. ()は隔年結果指数で値が大きいほど隔年結果程度が大きい
 3. 誤差線は標準偏差(n=9)を示す
 4. ハウス、露地ともウイルス、ウイロイドフリー樹に弱毒ウイルスM16A接種苗

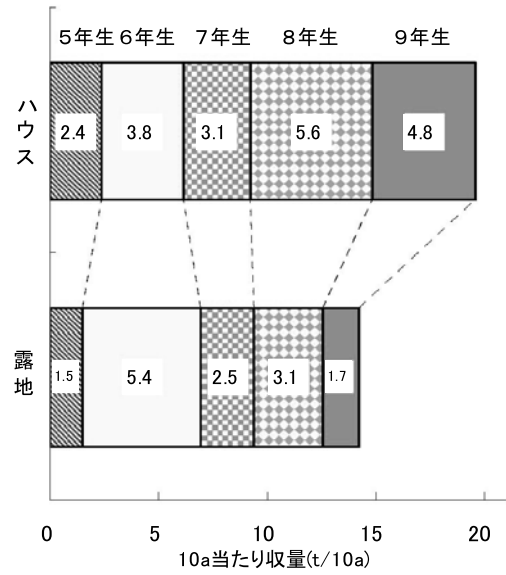


図2 無加温ハウス栽培における「不知火」の10 a 当たり収量 (平成16~20年)

- 注) 1. ハウス：栽植密度1.5m×2.0m 333本/10 a
 2. 露地： " 1.5m×2.0m 333本 →166本/10 a
 8年生収穫後に間伐実施



図3 無加温ハウス栽培における「不知火」果実

注) 果梗部のネック (凸形) が明瞭

表1 「不知火」の糖度、クエン酸含量 (平成16~20年)

栽培	月/日	糖度	クエン酸含量	甘味比
		Brix	g/100ml	
無加温	2/20	13.5	1.12	14.04
ハウス	2/20	13.6	1.28	12.91
	3/20	13.0	1.05	14.65

- 注) 1. ハウス、露地とも1月中旬に収穫してポリ個装し、貯蔵庫で常温貯蔵
 2. 可食期の目安は糖度13度、クエン酸1.0 g/100ml程度で甘味比13以上

[その他]

研究課題名：ミカン新品種・有望品種の早期成園化技術の開発
 予算区分：県特 (おいしく、健康に良い新品種開発事業)
 研究期間：平成20年度 (平成16~20年)
 研究担当者：松本和紀、大倉英憲、村本晃司、牛島孝策